



E c h o No. 1 7 1
令和6年 正月号
院寺寺寺
峰福林禅
一禅禅宗
* * * *
羽村臨濟会

自然の中の人間

地球温暖化が叫ばれて久しいですが、我々が住むこの地球は、ゆっくりと、でも確実に人類の住み易い処ではなくなっている様に感じます。

九州では毎年の様に大雨により災害が起こり、その都度亡くなる方が出ています。大雨災害にあまり縁の無かった東北地方においても頻発する様になりました。ここ二十年程で我々を取りまく環境は大きく変わったと実感されている方も多いのではないかと思います。

そんな中、欧米を中心として温暖化対策は活発に議論されています。いわく「地球を守れ」「自然にやさしく」などとい

うスローガンを掲げ声高に主張する人達をニュース等でご覧になった方もいらつしやるでしょう。

私は、しかしそこに違和感を覚える事があります。「地球を守れ」とは、自分達人間にとつて都合のいい地球を守れという事でしょう。地球は人類よりはるか前より存在し、人類が滅亡してもあり続けるでしょう。地球にとつて守ってもらふ必要は無いのです。また、人間は生けとし生ける物の一つとして存在する、いわば自然の一部なのです。なのに自然に生かされているという本来の姿を忘れ、自然をコントロールしようとし、それが

出来ると思っている。「自然にやさしく」という言葉には人間の傲慢さを感じずにはいられません。

自然は元々人間の都合など一切斟酌しません。それは多くの災害を経験して来た日本人なら良くご存知でしょう。一方穏やかで多くの恵をもたらすものでもあります。我々人間は自然の持つその二面性に、時には畏怖し、時には感謝し、いわば自然の手のヒラで生かされている物として畏敬の念を忘れてはいけなひではないでしょうか。

都市での生活は、ある意味快適なものです。空調もいき届いていますし、自然の人間にとつてマイナスな部分がある程度取り除いてくれていますから。しかしそういう場所での生活が我々を勘違いさせているのかも知れません。自然への畏敬の念を持ちつつ、自然の一部、一員として温暖化という問題を考えていかなければと思つていきます。

(一峰 義紹)



く 禅語に学ぶく

看看臘月盡

(看看臘月盡)

「ぼくと生きては

なりませぬ」

毎年、年の瀬になりますと、月日の流れの速さを実感いたします。仕事や家事、育児に追われている毎日を過ごしていると、あつという間に月日が経ち、気づけばもう十二月、なんてことはよくある話です。十二月になって、一分一秒を無駄にしないように急にバタバタと行動しがちではありますが、十二月に限らずとも無駄な時間はないのです。

そして、また新しい年が明けました。

これから始まる一年の、一日一日を大切にしたいと思いい、この禅語を紹介させていただきます。

「看看」は、「よくみる」という意味であり、「みるみるうちに・やがて」という意味もあります。そして、「臘月」は

陰暦の十二月です。つまり、「看看臘月盡」は、「みるみるうちに十二月は尽きていく」となり、「あつという間に今年が終わってしまうぞ」ということを意味しています。

また、十二月は年の最後の月であるように、人生の執着点であることを暗示しています。このことから、「あつという間に一生が尽きてしまうぞ」という意味にもなるのです。

つまりこの禅語は、「人の命は有限であるため、一日一日をよく見て大切に過ごさない」と、私たちに論しているのです。また、「今生きている命を改めて見つめ直さない」とも捉えられます。

某番組で言っておりましたが、時の流れが速く感じるのは「ときめき」が無くなったからだと思います。つまり、歳を重ねると共に、人生の中に慣れというものが増え、新鮮味が無くなっているということでしょうか。

幼い子どもは、何もかもが新鮮に見えております。新しい物事に触れたとき、五感で感じた感情が大いにあふれます。その大きな感情が、時の流れの感じ方に大きく影響を与えるそうです。つまり、子ども達は、一日一日を「よく見ている」ということになりませぬ。

もし、時の流れが速く感じておりましたら、是非とも新しい物事に挑戦してみてくださいいかがでしょうか。きっと新たな「ときめき」が生まれるはずですよ。

人生逆行は出来ませんが、「看看臘月盡」ばやばやとしていっていると、またあつという間に十二月が来てしまいますよ。

(禅福 尚玄)

禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XIV

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思います。

清水の次郎長との友誼

「咸臨丸事件」を機に交流を深めた鉄舟と清水の次郎長の逸話をお話したいと思います。

鉄舟の人柄にほれ込み足繁く出入りする様になった次郎長との交流は鉄舟が東京に戻ってからも続きました。自ら訪ねる事が出来ない時は手紙をしたためた様です。元々、文字を知らなかった次

郎長ですが、勉強して仮名文字は使える様になりました。

ある日、鉄舟宅を訪れた次郎長は「皆は先生のことを偉い偉いと言ってほめるが、私にはそれ程偉いとは思えない。先生から来る手紙はむつかしくて私には読めないし意味もわからない。人が見て読めない様な手紙を書く先生のどこが偉いのか私にはわからない。」といました。これには鉄舟もハツとして今までの独りよがりな詫言、その後は仮名文字ばかりの手紙を送る様になったという事です。

またある日、東京の鉄舟宅を訪れた次郎長に鉄舟は一腰の短刀を与えました。そしていうには「これはすこぶる名作だ。だからやたら抜くんじゃねえぞ。お前が一生の大事のとき以外は決して抜くんじゃねえ」と堅く戒めました。次郎長はたいそう喜び静岡への帰路につきました。途中、箱根の山にさしかかった時、駕籠を雇いました。山深い物寂しいところに来るとかごかき達は酒代をねだり出し

ました。次郎長が応じないと彼らは怒って次郎長を老いぼれ呼ばわりしたあげく、嫌ならここで駕籠を降りろと脅しました。持ち前の癩癩が爆発して、思わず短刀に手を掛け斬ろうとしたその時、鉄舟の言葉を思い出し、すんでの所で思いとどまり、微笑しながら「よしよし、酒代は望みどおりやるから、とにかく約束の三島までやれ。」といました。

三島に着くと数十名の子分が出迎えていました。駕籠から降りた次郎長に「ぺこする様を見てかごかき達は自分達の運んだ老人は、あの清水の次郎長親分だったのかと判り、生きた心地がしません。ジロリと一瞥をくれた次郎長に「そら、酒代だよ。」といわれ、平身低頭お辞儀をする事しかできませんでした。後にその勇氣に感じたかごかき達は、許されて子分の群れに加わったという事です。次郎長の純粹な人柄を鉄舟は大いに愛し、だからこそ多くの子分に慕われたのでしよう。以下次号（一峰 義紹）



禅寺雑記帳

◆令和六年となりました。世界が平和になり、良い年になる事を祈念いたします。今年も羽村臨済会をよろしくお願ひいたします。

◆写真は山岡鉄舟の書で

「成名毎在窮苦日」

「名を成すは毎に窮苦の日に在り」



と書かれています。中国の『小窓幽記』

という古典にある言葉です。苦しい時に

諦めずに頑張つて努力しなければ、成功

するということは無いです。もし今上手く行

かなかつたり、失意のどん底にあつたと

しても、それを乗り越えれば必ずこの先

に光が射す、という意味の言葉です。

◆これには下の句があつて、

「敗事多因得意時」

「敗れる事の多くは得意の時に因る」

全てが上手く行き、自分のやる事は全て

正しいと思ひ上がった時が、失敗への入

口なのだ、と戒めています。

◆渋沢栄一や、山種グループ創始者の山

崎種二などが座右の銘とした言葉です。

大きな困難や挫折を乗り越えた人が偉人

となるのです。

◆辛い事があつた時、この言葉を思い出

すだけで勇気が出てくる言葉だと思いま

すし、上手くいって調子がいい時も、気

を引き締める事が出来る素晴らしい言葉

だと思ひます。

(禅林 恭山)